

QRコード付植物名札を活用した自然遊びの継承に関する教材開発 —保育者養成校における学生を対象として—

上田 星

UEDA Sei

本研究は、保育者養成校の学生を対象に QR コード付名札を活用した自然遊びの継承に関する教材を開発し、多様な利用主体への活用の可能性を検討することを目的とした。

調査の結果、本教材には 1)保育者同士、2)保育者と子ども、3)保護者と子ども、4)保護者同士、5)地域の5つの視点から、世代間交流を促す媒介的教材としての活用可能性があることが示唆された。特に、若手とベテラン保育者の知識・技能の相互補完による協働的關係の構築、保育者による自然遊びの継承を通じた子どもの自然への感性の育成と持続可能性への意識の醸成、保護者による経験の語りや共主体的な探究としての親子の自然との関わり、保護者同士が交流可能なコミュニティの創出による孤立感の緩和、地域との連携強化などが期待される。一方で、植物の地域性、生態系との関係、安全面への配慮なども検討課題として残されており、今後は本教材の活用可能性についての実証的な検討が求められる。

キーワード：自然遊び、遊びの継承、ICT活用、世代間交流

1. 背景と目的

近年、都市開発に伴う自然環境の減少や情報化社会の進展による遊びの変化、気候変動による外出機会の制限など、社会の様々な変化を背景とした生活様式の変容に伴い、子どもの自然離れが進んでいる。国立青少年教育振興機構の「青少年の体験活動等に関する意識調査（令和4年度調査）」によると、2010年代を通じて子どもの自然体験の機会にやや減少傾向が見られ、特にコロナ禍以降にその傾向は顕著に見られることが指摘されている。こうした現代社会における自然離れの現状は、「経験の消失」と表現され(曾我ら 2016)、経験の消失は大人になってからの環境保全に対する態度の低下や行動の減少に繋がりとされている(Wells & Lekies 2006)。経験の消失の進行を防ぐためには、幼少期から自然との関わりへの意欲の向上に繋がる自然体験活動の「機会」の確保が必要であると言える。

自然との関わり方はかつて、地域に住む様々な世代の人々（祖父母、きょうだい、地域の大人など）から、日常生活や遊びを通して継承されてきた。しかしながら、

核家族化や地域コミュニティ（自治会、町内会、児童クラブなど）の希薄化、都市化、安全意識の変化などを背景に、世代間での自然体験活動の継承の機会が減少し、地域に根差した自然を生かした体験の継承が難しくなっているのが現状である。

自然との関わりは子どもの心身の発達において重要な意義がある一方で(高橋ら 2007, 山川 2019)、地域社会において自然体験の機会を設けることが難しい現状があることを踏まえると、保育施設においてその機会を保障していくことは、現代社会においてより重要な意義があると言える。現行の「幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容」の領域「環境」においても、「身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」と記されているように、自然との関わりを通して心身が育つことが期待されている。また、「幼稚園教育要領 前文」に記される「持続可能な社会の創り手となることができるようにするための基礎を培う」ことができるように、保育を通して自然に対する豊かな感性を育むことも求められている。様々な事象に対する意識の基礎を育む乳幼児期における自然体験活動は、その後の自然に対す

る向き合い方に多大な影響を与える重要な機会となると考えられる。子どもが自然と向き合う機会を十分に確保することができるように、保育内容を計画するのが保育者の役割である一方で、保育者自身の自然との関わりに対する興味や関心も低下してきていることは大きな懸念点として挙げられる。保育職を目指す学生の自然との関わりに対する抵抗感が高まっており、特に虫との関わりに対して抵抗感が高いことは顕著に示されている(木村ら 2016, 平田ら 2017, 山野井ら 2021)。

現行の「保育所保育指針 第1章総則」において「保育は遊びを通して総合的に行う」こと中心とすることが明記されているように、保育の中心的な要素は遊びであり、保育における自然との関わりは一般的に「自然遊び」と表現される。保育における自然遊びには、植物を使った自然遊び、昆虫採集、植物の栽培及び収穫、木登りなど、機能的遊びや象徴遊び、構成遊びといった多様な遊びに分類される。さらに、自然環境の多様な地形や植生は、こうした遊びをより豊かにし、多様な活動を促す。また、自然の遊び場での活動は子どもの運動能力の向上に寄与するとともに、発達の複数の側面に同時に働きかけると考えられている(Fjortoft 2004)。実際に、子どもたちは園庭で植物を求めて探索し、心が動かされた植物を採集してじっくりと観察する。そして、その植物と関わる中で生まれてきた自身のアイデア(発想)を基に、他の素材と組み合わせながら新たな表現を生み出し、友だち同士でその喜びを分かち合う姿が、保育の光景として広がっている。さらに自然遊びには、多様な自然の要素との接触の機会があることが特徴として挙げられ、様々な自然と触れ合い、異なる感触や形状の素材と関わることを通して、五感を使った経験が広がったり、季節による様々な変化に気付いたり、植物毎に異なる生き物との触れ合いがあったりなど、多様な関わりを経験を味わうことができる。

以上の理由から、子どもと保育者の自然離れが進む現状にある中で、保育における自然遊びの継承は、子どもの発達においても重要な意義を有していることに加えて、持続可能な社会の創り手となるように学びを支えていく上でも重要な位置づけにあると言える。本研究では自然遊びの継承の手段として、「植物名札」を活用した実践に着目する。植物名札とは、対象の植物に名札を掲示することを通して、自然に対する興味や関心を高めることを目的とした教材である。植物名札を活用した実践は、就学前の保育現場や就学期以降の学校教育現場(小・中・高校・特別支援学校)を中心に展開されてきた。代表的

な実践研究としては、梶村ら(2021)が挙げられる。梶村らは特別支援学校の校内にある32種の樹木および大型多年生草本を対象に、「QRラベル[®](アボック社)」が作成するQRコードが記された樹名札を設置し、校内植物マップを作成している。樹名札のQRコードを読み取ると、植物の情報(植物名・解説・豆知識など)にアクセスすることができ、対象の植物に関する知識を得ることができる仕組みとなっている。本実践では更なる知識の定着を目指し、MIT(マサチューセッツ工科大学)メディアラボにて開発された教育用プログラミング言語Scratchを用いて「樹名ビンゴ」¹⁾を作成しており、上記の教材を用いた実践を通して、植物の形態や生態に興味をもち、探求へのきっかけになったことを報告している。その他の実践報告としては、武蔵大学における樹木QRコードプロジェクト(2020)が挙げられる。本実践は学生が構内で生育している200種以上の樹木と積極的に関わるための方法として開発されたものであり、武蔵中・高校の卒業生でもある植物学者と連携して、学生と共にQRコード付樹木札を設置した実践である。樹木札のQRコードを読み取ると、武蔵との関わりや木の利用方法など、文系の学生にも親しみをもてるように意識した、写真付きの文書を閲覧できるサイトにアクセスできるようになっており、学生の樹木に対する関心を高めることが目的となっている。また、就学前の保育施設や就学期以降の学校教育現場における取り組みとしては、ニッセイ緑の財団が提供する「樹木プレート」²⁾を活用した実践報告が数多く見られ、植栽や卒業制作、授業内での作成など、本教材を様々な方法で活用することを通して、自然との関わるの機会を創出していることがうかがえる。その他に、植物名札以外の媒体でQRコードを活用して自然への関心を高めることを目的とした実践として、山形市野草園と東北芸術工科大学による「ハナノナ」(2025)が挙げられる。「ハナノナ」は山形市野草園の野草について楽しく学べるカードゲームであり、「やそうカード」と「イラストカード」の2種のカードから由来を知る「連想ゲーム」、裏面のイラストのペアを見つけて遊ぶ「絵あわせゲーム」に加えて、植物検索システムに直結したQRコードが記されている。QRコードを読み込むと、野草の特徴や野草園内の分布図などの情報を得ることができる仕組みとなっている。

上記の先行研究及び実践報告の内容を検討した結果、植物名札を活用した実践は多様な園校種において見られているものの、主な活動内容は対象の植物についての知識を得ることまでに留まっており、梶村らの実践では樹

名ビンゴを基に対象の植物を目にする機会までは活動の内容として含まれているものの、実際に自然物を活用した自然遊びの「実施」という段階にまでは達していない。保育現場における活用を考案する際には、五感を用いて自然物と直接触れ合う原体験がその後の自然物に対する認識に影響を与えると考えられていることから(山田1983)、本研究では自然遊びの機会の創出という要素を、教材の特性に含める必要があると考えられる。

また、上記の先行研究及び実践報告においても、QRコードを植物名札に貼り付け、ICT機器で読み取ることによって情報へアクセスできる方法を採用しており、本研究においても同様の方法を採用する。保育現場におけるICT機器の活用については、保育者同士や保護者間での業務効率化や子どもの体験の補完的な活用などが主な目的とされており、ICT機器の活用スキルの向上が保育者に対してより一層求められるようになってきている。文部科学省(2017)「教職課程コアカリキュラム」における「保育内容の指導法と保育構想の伝達目標」では、「各領域の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し、保育の構想に活用することができる」と記されており、保育者自身にICT機器の活用の在り方を探究していく姿勢が求められている。養成段階から保育現場での活用を意識した多様な活用経験の蓄積とスキルの向上に向けて学びを設計していくことを意識する必要があるため、本教材の特性に上記の点も含める必要があると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では子どもの自然遊びの機会の創出とICT機器の活用の2つの要素を教材の特性として含めた新たな教材の開発を試みる。そして、本教材の制作を通しての学生の学びについて検討し、自然遊びの継承に向けた教材の活用の可能性について提起することを目的とする。

2. 方法

1)調査対象

調査期間：2025年4月16日～7月23日

調査対象：兵庫県K短期大学の2025年度前期開講科目「子ども学ゼミA」(卒業必修科目)の受講生1年生24名

調査対象場所：構内で自生している植物(野草・樹木)があるエリア

全ての活動終了後、調査対象者である学生に対してGoogle formによるアンケート調査を実施した。質問内容については、本教材の活用可能性について、「子ども」、「保護者」、「保育者」の3つの視点から、自由記述で回答

を得た。

2)分析方法

本研究では、回答者から得られた自由記述式の回答を分析対象とし、SCAT(Steps for Coding and Theorization)による分析を行った。SCATは大谷尚によって開発された質的研究の手法であり、言語データをセグメント化し、それぞれに1)データ中の着目すべき語句、2)それを言い換えるためのデータ外の語句、3)それを説明するための語句、4)そこから浮き上がるテーマ・構成概念の抽出という4段階のコーディングを行い、最終的にストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きを行う分析手法である(大谷2011)。SCATを用いた研究は幼児教育学を含む多様な領域で採用されており、自由記述のデータは、量的指標では還元しにくい多様で複雑な表現を含むため、学生の記述に込められた意味を抽出し、共通性や相違性を整理する質的分析が適していると考えられる。とりわけ本研究は新たな教材の開発を試みており、その活用の可能性や課題を検討する上で、学生の自由な意見の多様さを重視し、それを十分に分析に反映させることが求められる。分析手続きが明晰であることや小規模のデータの分析にも適用できることが特徴であるため、本研究にも適していると判断し、SCATを分析方法として採用する。

本調査は学生へ事前にWeb上で書面にて説明を行い、同意を得た上で行った。また、本調査は本学内の倫理申請の許可を得て、実施された。

3. 結果

1)授業内容の概要

本教材の作成は、本科目(全15回)の内、計9回の授業期間で実施した(表1)。本実践は調査対象者を全5グループに分けて行った。各グループで進捗状況が異なっていたため、授業開始時に各グループの進捗状況の確認を行ってから、各回で取り組む課題の指示を出した。授業場所については、授業内容に応じて計3ヶ所(教室・屋外・PC教室)で実施した。

表1 「子ども学ゼミA」授業概要(本教材作成の該当回のみ)

授業回数	授業内容
①第6回	植物探し(写真撮影)
②第7回	担当植物決め・グループ分け (全5グループ)・自然遊び1回目
③第8回	自然遊び2回目(動画撮影)

④第9回	自然遊び3回目（動画撮影・編集）・ 植物名札デザイン案出し
⑤第10回	植物名札作成1回目・植物しおり作成1回目
⑥第11回	植物名札作成2回目（完成）・ 植物しおり作成2回目（完成）
⑦第12回	植物名札設置・ 成果発表（各グループ・同ゼミ学生向け）
⑧第13回	成果発表準備
⑨第14回	学生成果発表（付属園保育者向け）

2)授業の実際

本実践ではQRコード付植物名札の作成を行った。植物名札はニッセイ緑の財団からの寄贈品である「樹木プレート」を使用した。名札の表面に植物名及び植物の絵を描き、QRコードを名札の右下部分に貼付した（図1）。QRコードには学生が撮影した「自然遊び動画」及び、学生が作成した植物の特性が記された「植物しおり」にアクセスすることができるURLに紐づいており、QRコードをICT機器（タブレット端末・携帯等）で読み取ることで簡単に閲覧できる仕組みとなっている。以下に、作成過程について整理する。

①第6回：植物探し

構内の調査対象場所（屋外）に自生している野草及び樹木を自身の携帯で撮影し、授業後に撮影した写真を担当教員（筆者）へメールに添付して送信した。学生から送付された内容を整理し、自然遊びに活用できると考えられる植物を筆者が選定した。植物の選定は保育現場で遊べる植物を豊富に扱っている、出原(2010)『自然・植物あそび一年中：毎日の保育で豊かな自然体験！』を参考に行った。

②第7回：担当植物決め・グループ分け・自然遊び1回目

授業の冒頭で、選定した植物一覧をホワイトボードに書き出し、担当植物の希望調査を口頭で実施した。全ての希望に沿うことは活動の時間的制約上困難であったため、可能な限り希望の植物を担当できるように配慮し、全グループを構成した（表2）。本研究では自然遊び動画作成のために、自然遊びの様子の動画撮影及び編集を行う必要があるため、各グループの構成メンバーとして、自然遊び2名及び撮影者1名、編集者1名の計4名以上になるように編成した。その後、各グループに分かれ、屋外に担当する植物を採取して自然遊びを行った。尚、本研究における植物採取は、大学構内において、教

育・研究目的で必要最小限の範囲で実施した。また、事前に大学責任者の許可を得るとともに、採取対象や方法についても報告・相談を行った。希少種や保全上重要な植物については、本研究の対象場所には存在しなかった。

表2 担当植物一覧

グループ	担当植物
A	オオバコ・カタバミ・ビワ（樹木）
B	カラスノエンドウ・ナズナ・ イロハモミジ（樹木）
C	コメツツメクサ・ハルジオン・ レッドロビン（樹木）
D	シロツメクサ・タンポポ・ タイサンボク（樹木）
E	セイタカアワダチソウ・ヨモギ

※調査対象場所に生えている樹木は4種類であったため、Eグループのみ該当なし。

③第8回：自然遊び2回目（動画撮影）

各グループに分かれて自然遊び、動画の撮影を実施した。

④第9回：自然遊び3回目（動画撮影・編集）・植物名札デザイン案出し

授業の冒頭で植物名札の概要の説明を行い、各グループに植物名札に描くデザインの下書き用紙を配付した。各グループの進捗状況に差があり、自然遊び動画の撮影、動画の編集、植物名札の下書きなどに取り組み、必要に応じて担当教員（筆者）が活動の助言を行った。

⑤第10回：植物名札作成1回目・植物しおり1回目

先述した「樹木札」を使用し、QRコード付植物名札を作成した。配付された「樹木札」に水性カラーマジック（本財団推奨）を使用して作成した。植物しおりについては、本財団から寄贈された内容を参考に、筆者が独自に植物しおりの見本をPower pointで作成し、学生にGoogle Classroomにて共有した。学生は見本データを基に、自身のグループの対象の植物の内容に編集して作成した。

⑥第11回目：植物名札作成2回目（完成）・植物しおり作成2回目（完成）

前回到引き続き、各グループの進捗状況に応じて、植

物名札と植物しおりの作成を行った。完成したグループから順に、担当教員（筆者）へ提出した。

⑦第12回目：植物名札設置・実践発表（各グループ）

本研究の対象植物である4種類の樹木に植物名札を学生が設置し（図2）、野草については1つのプレートにまとめた。全グループが設置を終えた後、グループ毎に担当した植物の自然遊びの紹介をし、実際に自然遊びを体験した。各担当グループは自身が担当した自然遊びの要点について、他の参加学生に伝える場面が見られた。

⑧第13回：成果発表準備

担当教員から指定された各グループ1種類の自然遊びについて、遊びの要点（コツ・注意点など）について学生同士で考える時間を設けた。必要に応じて自然遊びで使用する道具の補強や再度自身で遊ぶなど、次の発表に向けて各々で活動している様子であった。

⑨第14回：学生成果発表（付属園保育者向け）

付属園の園長及び保育者を対象に、学生の成果発表を行った。事前に付属園の保育の現状について園長からヒアリングを行い、自然遊びの機会が十分に無いことが課題として挙げられたことから、保育者自身の自然遊びのアイデアを得ることを目的として、QR付植物名札を活用した自然遊びの体験の機会を提供した。今回が学生の取り組み成果の集大成の位置付けでもあるため、各グループが担当した植物を紹介し、自然遊びの体験の機会を提供した。



図1 QRコード付植物名札

※カラスノエンドウは授業時間の都合上、植物名札の作成なし（自然遊び動画及び植物のしおりのみ作成）



図2 担当植物一覧

3)分析結果

本研究の調査対象者からのアンケート回答者は9名（回答率37.5%）であり、調査の結果について、以下に論じる。また、分析データについては巻末の「付録」に記載する。

①子どもの観点からの活用可能性

子どもの観点における本教材の活用可能性について、以下のストーリーラインを作成した。

本教材の子どもの観点からの活用可能性について、自然遊びの継承者が減少し、子ども自身も自然との関わりが希薄化している現状を踏まえると、子どもに「自然と主体的に触れ合う機会」を提供する役割を担い得ることが挙げられる。子どもは本教材を通して、対象となる植物の遊び方を知り、実際に自然に触れる契機を得ることで、五感を通した原体験として自然への関心を深めていくことが期待される。こうした経験は、植物の生態や自然の仕組みへの理解を広げるとともに、地域の歴史や文化へと関心が連続していく可能性が示唆された。また、遊び方が予め提示されていることによって、子どもは自然物を用いた遊びを具体的にイメージしやすくなり、想像力や創造力が喚起されることが予想される。その結果、本教材は子どもの探究心を促進し、遊びを通して学びを自ら広げていく視点として機能することが期待される。さらに、園内に設置された本教材は、すべての子どもにアクセスが可能であり、植物への学びが平等に保障されるという特徴を有していると考えられる。加えて、本教材を子ども自身が作成する場合は、絵画表現を通した制作過程そのものが、植物の特徴を深く理解する学びの機会となる可能性が示された。QRコードを自ら読み取る経験は、ICT機器を新たな道具として主体的に扱う経験

も伴っていた。こうした学びや気づきは、家庭へと持ち帰られ、子どもが保護者に遊びの内容を共有することで、親子間のコミュニケーションの契機にもなり得ることが見出された。

子どもの視点から見た本教材の活用可能性には、以下のような理論的特徴が見出された。

第一に、本教材の背景には、自然遊びを継承する大人の減少と子どもの自然離れという社会的状況が存在することである。そのため、本教材は自然と主体的に触れ合う機会を補填し、体験的な学びを再構築する機能を担うと考えられる。五感に基づく原体験として自然遊びに取り組むことは、植物や自然環境に関する知識の獲得を促進するとともに、その学びから派生する好奇心の高まりによって、歴史や文化への理解、さらには持続可能性への視点へと学びが連続する可能性を内包していると言える。第二に、本教材に含まれる「遊び方の提示」は、自然物を媒介とした遊びを具体化し、子どもの想像力・創造力を喚起する要素として機能することである。これは、自然との関わりを広げていく探究的な学びを促す点で重要である。第三に、園内に本教材が設置されることにより、子どもは平等に自然物へのアクセスが保障され、自然環境を理解する機会がすべての子どもに開かれたものとなると言える。第四に、子ども自身が本教材の制作に関わる場合には、絵画表現を通して植物の特徴を観察し、自然物に対する理解を深めるだけでなく、QRコードの読み取りといったICT活用の経験も伴い、現代的な学びの道具を扱う力の育成にも繋がると考えられる。

最後に、本教材をきっかけとした自然遊びの体験が家庭で保護者に共有されることで、親子間でのコミュニケーションが新たに生まれるという点も、教材の重要な機能として位置付けられると言える。

以上のように、本教材には子どもの自然との主体的な関わりを促し、多様な学びへと発展する可能性が見出された一方で、今後さらに検討すべき点や課題も存在する。第一に、本教材においてQRコードを読み取る主体を誰に設定するかという問題が挙げられる。子ども自身が主体的に情報へアクセスする場合と、保育者や保護者が介在する場合とでは、学びの深まり方や体験の意味づけが異なる可能性があり、その差異を明らかにする必要がある。また、教材の作成者と利用者を誰に設定するかによって、学びのねらいや体験の構造が変容する可能性がある。例えば、子ども自身が教材を作成する場合には、表現活動を通じた深い理解が期待される一方、保育者が作成した教材を子どもが利用する場合には、知識の獲得や

探究の入り口として機能するなど、学びの性質に違いが生じると考えられる。第二に、本教材を通して閲覧できる動画内容の構成に関して、どの範囲まで情報を含めるべきかという検討が求められる。例えば、植物の特性や安全面への配慮、周辺に棲息する生物との関わりなど、子どもの理解や興味の発展に影響すると考えられる要素をどこまで提示すべきか、教材の目的や対象年齢によって調整する必要がある。第三に、遊び方を示す本教材がもたらし得る「創造性の抑制」の懸念に対しては、保育者や保護者がどのように援助し、子どもの主体性や探究心を損なわない関わりを行うかが重要な点となる。大人の援助の在り方は子どもの遊びの広がり大きな影響を与えるため、適切な援助の在り方を見極めることが求められる。第四に、自然遊び文化の継承を妨げている要因についても明らかにする必要がある。保育者自身の自然との関わりに対する抵抗感や、子どもの自然離れを生み出す要因など、環境・心理・社会的な側面を複合的に検討することが求められる。最後に、本教材をきっかけに広がる親子間のコミュニケーションについても、その具体的内容を明確化する必要がある。家庭内での自然に関する会話、自然遊びの共有、植物の生態や仕組みへの更なる探究など、どのような学びや関係性の変化が生じるのかを丁寧に検証することは、本教材の意義をより実証的に位置付ける上で重要であると言える。

②保護者の観点からの活用可能性

保護者の観点における本教材の活用可能性について、以下のストーリーラインを作成した。

本教材の保護者の観点からの活用可能性について、近年の保護者の多忙感や自然との関わりへの希薄化といった状況を踏まえ、いくつかの特徴的な学びの機会が示唆される。第一に、本教材を通して身近な植物を使った自然遊びを子どもと共に体験することで、保護者自身も未知への探究の機会を得ることができる。この過程で、子どもとの遊びに関する知識の蓄積やスキルの向上が促されるとともに、子どもの潜在的な能力が顕在化する様子を実感できる。また、遊びの過程で保護者が自身の文化的・歴史的経験を子どもに伝える場面も生まれ、親子間での新たなコミュニケーションが促進される。さらに、保育施設での活用においては、保護者同士や保育者との交流が生まれ、保護者の孤立感の解消やコミュニティ形成の契機として機能する可能性がある。地域で活用する場合には、地域の人や場との関わりを通して地域理解の深化や連携強化が期待される。これらを踏まえると、本教材

は家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な機能としての役割を担う可能性がある。一方で、自然遊びに関する知識が不十分な保護者が利用することを想定し、安全面への配慮を適切に組み込む必要がある。

保護者の視点から見た本教材の活用可能性には、以下のような理論的特徴が見出された。

本教材は共主体的な学びを促進する媒介的教材として機能する。保護者が子どもと共に遊ぶことにより、自然遊びを通した子どもの潜在的能力の顕在化が可能となる。また、遊びの過程で保護者が自身の文化的・歴史的経験を子どもに伝えることは、世代を越えた知識伝達および親子間のコミュニケーション促進という学びのメカニズムを示している。さらに、保育施設での活用は、保護者同士や保育者との交流を生み、保護者の孤立感解消やコミュニティ形成を促す点で社会的媒介の役割を果たす。地域での活用においても、地域住民や場との関わりを通して地域理解の深化や連携強化という教育的・社会的効果が理論的に支持される。以上の点から、本教材は家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な機能としての役割を担う可能性があると考えられる。尚、自然遊びの経験が少ない主体が使用する場合には、安全面への十分な配慮が必要である。

上記を踏まえ、本分析からは今後さらに追究すべき点と課題として、以下が示唆された。第一に、地域での活用においては、活動のきっかけを誰が担うか（子ども自身、保護者、地域住民）を明確にする必要がある。それによって、教材の管理や活用の方法にも違いが生じる可能性がある。次に、家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な役割をもつ教材として活用する場合、保育施設の役割や具体的な活用方法を明確化することが求められる。また、文化的継承や世代間での知識の伝達を行う際には、配慮すべき内容（伝達の順序や表現方法、年齢や経験差への配慮など）を検討する必要がある。さらに、本教材を直接体験のきっかけを与える重要な役割を果たす一方、親子間での学びの展開を意識的に設計することが求められる。また、教材の提示内容に頼りすぎることによって、親子間での創造的なアイデアが抑制される恐れがあるため、対象植物の特性や危険生物への対応、使用する道具やICT機器の扱いなど、主体によって適切に調整される必要がある。

③保育者の観点からの活用可能性

本教材の保育者の観点からの活用可能性について、以下のストーリーラインを作成した。

本教材の保育者の観点からの可能性については、若年保育者に見られる自然離れの傾向とICT活用経験の少ないベテラン保育者の現状を踏まえ、いくつかの特徴的な学びの機会が示唆される。第一に、保育者の世代間での交流を通した相互理解の促進と協働的関係の構築である。本教材は両者の得意分野を融合して作成するため、作成過程での交流が自然に生まれ、協働的に取り組む機会を創出する。また、教材作成を通して双方の知識とスキルを兼ね備えた保育者は、容易な導入による即時的な活動の実施が可能になるため、子どもの主体的・創造的な学びを支援する内発的動機づけの促進者となり、多様な自然遊びの継承が可能となる。さらに、園内の自然環境への理解が深まり、子どもの自然離れの現状に対して五感を用いた原体験の機会を創出することができる。第二に、保護者理解の深まりである。本教材を媒介として親子の関わりを把握するだけでなく、保育者自身が関わることで園と家庭との連携が強化される。第三に、地域との関わりでの創出である。保育施設での学びを地域に持ち出すことで、子どもや保護者の地域の自然への関心が高まり、地域理解の深化に繋がる可能性がある。第四に、アレルギーなどを考慮した教材・活動の選定が必要である。対象植物との関わりに潜む危険について、安全面の観点から十分な配慮を行う必要がある。

保育者の視点から見た本教材の活用可能性には、以下のような理論的特徴が見出された。

本教材は、保育者間の協働的学習を媒介する教材として機能する。教材作成を通して、若年保育者とベテラン保育者の異なるスキルが融合され、世代間交流を通じた相互理解と協働関係の構築が促進される。これにより、子どもの主体的・創造的な学びを支援する内発的動機づけの促進者としての保育者の役割が強化される。また、本教材を活用することで、園内の自然環境への理解が深まり、五感を通した原体験の創出が可能となる。さらに、教材を媒介として親子関係や保護者との関わりが把握できるようになり、園と家庭の連携強化が期待できる。地域での活用を通して、地域理解や地域社会との連携強化にも繋がると考えられる。尚、本教材の使用にあたっては、アレルギーやその他の安全面への配慮が必須である。

以上を踏まえ、本分析からは今後さらに追究すべき点と課題として、以下が示唆された。第一に、園内に本教材を設置する場合、樹木以外の野草の設置方法や管理の工夫について検討が必要である点である。また、職場内で良好な人間関係を構築するために必要な要素や、教材作成の時間が十分に園全体で確保できない場合にどのよ

うな工夫をすべきか、といった点が課題として示唆される。第二に、アレルギー以外に配慮すべき安全上の要素（棘のある植物や毒性のある植物など）が何かを明確化する必要がある。これらの課題は、本教材の活用の効果的实施と安全確保、世代間交流の質を高めるために重要である。

4. 考 察

本研究では、保育者養成校における学生を対象に校内で自生している植物を用いたQRコード付植物名札を作成し、自然遊びの継承に貢献し得る教材の開発を試みた。本研究を通して「子ども」、「保護者」、「保育者」の3つの視点から本教材の活用可能性について分析した結果、本教材は「多様な世代間交流を促す媒介的教材」としての活用可能性があることが示唆された。以下に、本教材の活用可能性として提起された5つの世代間交流について論じる。

第一に、「保育者の世代間交流」について、本教材を若年保育者とベテラン保育者が主体となり協働して作成することを通して、相互の理解促進と協働的関係の構築に繋がり、職場内の人間関係の円滑化に作用する可能性があることが示唆された。若年保育者の自然遊びの経験不足とベテラン保育者の不慣れたICT活用経験を、相互の得意分野で補填し合うことにより、両者の知識とスキルを兼ね備えた保育者の育成に繋がると考えられる。特に、保育者の主な離職要因の一つとして「職場の人間関係」³⁾が挙げられており、信頼関係を築くための機会が不十分であることも課題として指摘されている。そうした現状において、作成の過程では自然とコミュニケーションの機会が生まれ、相互の理解や協働的な関係の構築へ繋がり、職場内の人間関係の円滑化や新任保育者の活躍の機会の創出の契機となると考えられる。

第二に、「保育者と子どもの世代間交流」について、本教材の作成を通して自然遊びとICT活用に関する多様な知識とスキルを兼ね備えた保育者によって、子どもに多様な自然遊びの継承を行うことができると考えられる。また、子どもを活動の主体として植物名札の作成及び活用を考える場合には、作成過程において、多様な植物について調べること、植物の絵を描くこと、情報機器でQRコードを読み取ること、実際に対象の植物で遊ぶことなどを通して、園内の自然環境の把握や自然の特性への理解に繋がることが期待される。子どもの自然離れが進んでいる現状において、本教材の活用を通して自然との関わりの機会が創出され、自然に対する豊かな感性

が育まれることに繋がり、持続可能な社会に向けた視点をもつことができるような実践への応用も可能であると考えられる。

第三に、「保護者と子どもの世代間交流」について、人生観の変容に伴う共働き家庭の増加や物価高による家計負担の増大に伴う長時間労働化などを背景に、多忙感を抱える保護者が増加してきており、家庭で子どもと関わる時間は非常に重要である一方で、SNSなどで情報が錯綜する中、コミュニケーションのために子どもと一緒に遊ぶためのアイデアを取捨選択することにも負担感を抱く保護者も少なからず一定数いると考えられる。時間的制約下にある家庭の親子間でのコミュニケーションの機会の創出として、本教材の活用の有効性が考えられる。子どもの送迎時に保育施設で本教材の存在を知り、実際に多様な自然遊びを保護者が知ることを通して、即時的に実践に移すことができるため、子どもと直接関わる時間をより確保することができると考えられる。また、若者の自然離れの現状は保護者にも同様に見られるため、子どもと保護者が共主体的に自然の未知な領域について探究していく姿は、保護者自身の遊びの知識とスキルの向上に繋がることや、子どもの潜在的能力の顕在化を感じることができ、その後の育児への意欲向上にも繋がることが期待される。また、活動の際には保育施設だけでなく、地域の自然（公園・川など）へ足を運ぶきっかけとなり、地域への理解にも繋がることも考えられる。さらに、子どもとの遊びを通して保育施設での学びを子どもの姿から感じることができ、園と保護者の関係性の強化にも影響を及ぼす可能性があることが示唆された。

第四に、「保護者同士の世代間交流」について、人生観の多様化に伴うライフスタイルの変化によって、保育施設を利用する子どもの保護者の年齢層も多様化する中、世代の異なる保護者との関係構築の困難さが増しており、相談相手がおらずに育児に対して不安を抱える保護者の孤立感が問題視されている⁴⁾。本教材を通して、世代の異なる保護者も含めた、保護者同士の交流のためのコミュニティとしての場を生成する機能も活用可能性として考えられる。また、親子での関わりの様子を保育者が目にすることができるため、親子関係の理解へと繋がるだけでなく、分からない植物を保育者に聞くなどのコミュニケーションの機会を創出する契機ともなると考えられる。つまり、本教材を媒介とした保育施設・保護者・子どもを繋ぐコミュニティの場としての機能をもたらす可能性があると考えられる。

第五に、「地域における世代間交流」について、本教材を通して地域へ足を運ぶ契機となることを論じたが、地域の連携強化は自然遊びの継承においては、非常に重要な要素として挙げられる。また、質の高い保育を目指す上でも、地域の資源の活用の重要性が謳われる中で、保育者自身の地域への理解や関わりを経験の不足があることも指摘されている。本教材を通して、地域の自然環境に足を運び、地域の人々や場と関わり、地域を理解することを通して、連携強化に繋げていく可能性を秘めているのではないかと考えられる。

以上を踏まえ、本教材は多様な世代間交流を促す「媒介的教材」としての活用があることが示唆された。「媒介的教材」とは、ヴィゴツキーの文化・歴史的発達理論における「媒介(mediation)」の概念に基づいて捉えることができる。Vygotsky(1978)は、人の認知的・社会的発達には、他者との相互作用だけでなく、道具や記号といった物的・象徴的資源によって媒介されると述べており、これは後に Wertsch(1998)によって「媒介された行為(mediated action)」として理論化され、Engestoröm(2015)の活動理論においても、人間の活動は「主体—対象—媒介物」が三角構造を形成すると捉えられている。つまり、教材は単なる「モノ」ではなく、主体の関係性や理解を繋ぐ「間にあるもの」として捉えることができる。この理論的枠組みに基づき、本教材を単なる自然遊びを紹介するための情報提供の手段としてではなく、人と人・活動・環境を繋ぎ、理解や関係構築を支える「媒介物(mediating tool)」としての機能をもつ可能性があることが考えられる。

本研究の課題として、以下の点が挙げられる。第一に、本教材は自然遊びの継承に焦点を当て作成されたものであり、自然遊びのアイデアを得ることを通して、自然との関わりを創出することが内容の中心であった。そのため、調査対象学生の自由記述の中にも見られた、生物多様性の保全という視点については不十分な点もあった。例えば、今回の対象植物の中には繁殖力の高い外来種(セイタカアワダチソウなど)が含まれるが、駆除のためには根から引き抜く必要があること、使用後はゴミ袋などにまとめて捨てる必要があることなど、扱い方の注意点について、担当植物に応じたより詳細かつ丁寧な説明の機会があった方が学生自身の学びにとっても望ましかったと考えられる。上記の内容以外にも、調査対象場所が地域の自然との分布の関係で担う役割について、エコロジカルネットワーク⁵⁾の視点からは十分に検討できていない点が課題として挙げられる。村井ら(2025)は、

学生が自然を活用した保育に意欲的になるためには、虫との関わり的重要性への理解や虫に対する恐怖心の低さが関係していると指摘しており、本教材を通してエコロジカルネットワークを意識した生き物との繋がり要素を視点に組み入れ、生き物に対する知識を深め、面白さや不思議さを実感して興味を高めることができれば、より一層活用への意欲は高まるのではないかと考えられる。また、植物は季節の変化に応じて様子も変化するため、季節が変化すると遊びに活用できない状態になる植物もあれば、新たに活用できるように生長する植物もある。今回の調査時期は春であったが、年間を通した自然遊びマップの作成を行うことで、学生の更なる自然遊びのアイデアが蓄積され、自然遊びの継承への更なる貢献が期待される。本教材はデータ保存が次々と可能なクラウドを使用しているため、本実践に留まることなく、様々な要素を加えて育てていくことができる教材である。本研究で検討が不十分であった課題については、今後の教育実践に活かしていきたいと考えている。本研究は教材の制作を通して、学生自身の記述から活用の可能性について提起することが目的であったため、今回提起された可能性について各場面において実証していくことは今後の検討課題とする。

注釈

1) 樹名ビンゴとは、5×5マス目で縦・横・斜めのいずれかが揃ったらビンゴになるゲームであり、ランダムで配置される25マスの植物を探す遊びである。見つけたマスをクリックすると、マスの色が変化し、学生自身が調べてまとめた植物の解説文が表示される仕組みとなっている(梶村ら 2021:131-132)。

2) 子どもたちが身近にある自然に関心を持ち、森林への理解を深めるため、保育・教育現場を対象に「ニッセイの森」の間伐材を活用した「樹木名プレート」の寄贈活動を行っている。

3) 東京都福祉保健局(2023)「東京都保育士実態調査報告書」の調査によると、離職要因として「職場の人間関係」が最上位に位置付けられている。また、経験年数が7年以下の離職が約半数を占めており、早期離職が課題として挙げられる(厚生労働省保育士等確保対策検討会, 2015)。園長に対する若手保育者に対する早期離職の予防のための取り組みについての調査では、ベテラン保育者との関わりに着目すると、困難な場面に直面した際の助言の機会の創出が中心となっており、若手保育者から学ぶことによる協働的な関係の構築という視点は乏しい現状である(加藤ら 2021)。

4) 地域コミュニティアプリ「ピアZZ」を運営するPIAZZA株式会社は子育て中および子育て経験者の「ピアZZ」ユーザー998名(女性806名・男性172名・未回答20名)にアンケート調査を実施した結果、保護者の67.1%(女性74.2%・男性35.5%)が子育て中の孤立感を感じており、孤独を感じる瞬間として、上位から順に、「子どもと二人きりでいる(58.1%)」、「大人と話す機会がない(46.0%)」、「子育て仲間の輪にうまく入れない(36.1%)」に位置付けられており、自分以外の大人と関わる機会が少ないことが原因にあると考えられる(PR TIMES 2024)。

5) エコロジカルネットワークとは、生物多様性の保全のための生態系の拠点の適切な配置やつながりのことを指す。その形成にあたっては核となる地域(コアエリア)及び、その地域の外部との相互影響を軽減するための緩衝地域(バッファゾーン)を適切に配置、保全するとともに、生物の分散・移動を可能として個体群の交流を促進し、種や遺伝的な多様性を保全するため、これらの生物の生息・生息地をつなげる生態的な回廊(コリドー)を確保することを基本とする(環境省 2009)。

5. 引用文献・参考文献

- 国立青少年教育振興機構(2024)「青少年の体験活動等に関する意識調査(令和4年度調査)」p.11, <https://koueki.net/user/niye/110376019-1zentai.pdf>, 2025.8.8閲覧。
- 曾我昌史,今井葉子,土屋一彬(2016)『「経験の消失」時代における自然環境保全:人と自然との関係を問い直す』『ワイルドライフ・フォーラム』20(2), p.24.
- Wells, N. M. & Lekies, K. S., (2006) Nature and the life course: Pathways from childhood nature experiences to adult environmentalism, *Children, Youth and Environments*, 16(1), p.18.
- 高橋多美子,高橋敏之(2007)「幼少期における自然体験の重要性の再検討と教育的意義」『理科教育学研究』48, pp.51-61.
- 山川晃(2019)「自然体験活動が参加者の『生きる力』に与える影響—メタ分析による検討—」『野外教育研究』22, pp.17-30.
- 文部科学省(2017)「幼稚園教育要領」p.14, https://www.mext.go.jp/content/1384661_3_2.pdf, 2025.10.1閲覧。
- 木村紗帆,野崎健太郎(2016)「保育者および教員養成課程の女子大学生が虫に抱く意識—虫嫌いの仕組み—」『椋山女学園大学教育学部紀要』9, pp.109-119.
- 平田豊誠・小川博士(2017)「幼稚園教諭・保育士志望学生の『虫』と『動物』についての意識調査」『佛敎大学教育学部学会紀要』16, pp.63-74.
- 山野井貴浩,伊藤哲章(2021)「保育者の虫嫌いの状況に関する調査—保育者志望の大学生や一般女性との比較から—」『環境教育』31, pp.33-39.
- 厚生労働省(2017)「保育所保育指針」p.9, https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/5bdae3f0-14d9-4237-ae44-85e1e2c70dcf/4bd48881/20240111_policies_hoiku-shishin-h20_06.pdf, 2025.10.1閲覧。
- Fjortoft, I., (2004) Landscape as playscape: The effects of natural environments on children's play and motor development, *Children, Youth and Environment*, 14(2), pp.21-44.
- 梶村麻紀子,中筋千晶,黒田充崇,宮井健至,高須英樹(2021)「樹名板を使った環境教育」『和歌山大学教職大学院紀要:学校教育実践研究』5, pp.129-135.
- 武蔵大学(2020)「樹木QRプロジェクト (Now武蔵野自然No-15)」, https://www.musashi.ac.jp/seminar_blog/lasec/20200626.html, 2025.5.13閲覧。
- 公益財団法人ニッセイ緑の財団HP「樹木名プレート・学校の木のしおり」, <https://www.nissaymidori.jp/experience/plates.html>, 2025.11.24閲覧。
- 山形市野草園(2025)「遊べる学べる花の名カード ハナノナ」, <https://www.yasouen.jp/hananona/>, 2025.8.1閲覧。
- 山田卓三(1983)『生物学からみた子育て』裳華房, pp.121-134.
- 文部科学省(2017)「教職課程コアカリキュラム」p.22, https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf, 2025.4.30閲覧。
- 大谷尚(2011)「SCAT: Steps for Coding and Theorization—明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法—」『日本感性工学論文誌』10, p.155.
- 出原大(2010)『自然・植物あそび一年中:毎日の保育で豊かな自然体験!』学研教育出版。
- 東京都福祉保健局(2023)「東京都保育士実態調査報告書」p.23, <https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/fukushi/3r4chosakekkanogaiyou>, 2025年11月1日閲覧。

-
- 厚生労働省保育士等確保対策検討会(2015)「保育士等における現状」p. 7,
https://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/27-2s5-5.pdf, 2025. 10. 1 閲覧.
- 加藤由美, 安藤美香華代(2021)「若手保育者の離職防止に向けて」『保育学研究』59(1), pp. 117-130.
- PR TIMES(2024)「7割以上の女性が子育て中に『孤独・孤立』を実感 PIAZZA、子育て経験者998名に『孤育て経験』に関する調査を実施」,<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/00000129.000016981.html>, 2025. 11. 22 閲覧.
- 及川留美, 岩崎淳子, 春日保人, 粕谷宣正, 金玟志(2019)「保育者養成校に通う学生の『地域』とのかかわりの実態—保育者養成における地域型保育教材の活用に関する基礎的研究として—」『東京未来大学研究紀要』13, pp. 151-156.
- Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological processes*. Harvard University Press.
- Wertsch, J. V. (1998). *Mind as action*. Oxford University Press.
- Engestoröm, Y. (2015). *Learning by expanding: An activity-theoretical approach to developmental research (2nd ed.)*. Cambridge University Press.
- 環境省(2009)「全国エコロジカル・ネットワーク構想(案) 1 エコロジカル・ネットワークの基本的考え方」p. 2,
<https://www.biodic.go.jp/biodiversity/activity/policy/econet/21-1/files/1.pdf>,
2025. 10. 1 閲覧.
- 村井あかり, 浅野由子, 徳田多佳子, 関谷美希(2025)「自然環境に対する保育者養成校の学生の意識について—虫に対する恐怖経験評価尺度を用いた質問紙調査より—」『日本女子大学大学院紀要』31, pp. 1-10.

6. 付録

子どもの観点からの活用可能性

No.	回答者属性			テキスト		
	学年	年齢層	性別	子どもへの活用可能性	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え
1	1年	18～19歳	女性	作る過程で植物のこを知る機会になるし、知ったことを両親と共有すればコミュニケーションにも繋がる。	植物のこを知る機会/ 両親と共有すれば コミュニケーションにも繋がる	知る機会/保護者とのコミュニケーションの機会
2	1年	18～19歳	女性	積極的に植物の生態を知ることができる。	積極的に植物の生態を知る	積極性/生態を知る機会
3	1年	22歳以上	女性	植物を通して歴史を知り、文化を知り、これからの未来を考えるきっかけになり得る。	歴史を知り、文化を知り/ これからの未来を考えるきっかけ	歴史や文化への理解/未来志向
4	1年	18～19歳	女性	子どもがICTに触れる1つのきっかけとなる。	子どもがICTに触れるきっかけ	ICTとの関わりの機会
5	1年	22歳以上	女性	大人から知識を与えて貰うばかりではなく、自ら自然遊びを知るとっかかりとしてQRコードによる植物名札を活用することは、子どもの植物を知りたいという知識欲や自然遊びについての興味もどんどん広がり、また植物を通して自然の仕組みや生態系について関心の幅が広がる可能性を考えます。	自ら自然遊びを知るとっかかり/ 子どもの植物を知りたいという知識欲や 自然遊びについての興味もどんどん広がり/ 自然の仕組みや生態系について関心の幅が広がる	主体的. 自然遊びを知る機会/ 意欲(興味・関心)の高まり/ 自然の仕組みや生態系への 関心の幅の広がり
6	1年	18～19歳	女性	植物遊びを伝授できる人材が不足するなかで子供はQRコードを読み込むことで学ぶことができるのだと思う。知る機会の喪失は起こらないのではないだろうか。	植物遊びを伝授する人材が不足/ 子供はQRコードを読み込むことで学ぶ ことができる/知る機会の喪失は起こらない	植物遊びの継承者の不足/ 主体的な 学び/ 平等な知る機会の保障
7	1年	18～19歳	女性	近年、子どもたちは、自然に触れる機会が少なくなっている。そのため、QRコード付植物名札を使って自然に触れてもらう機会を作ることが出来る。QRコードを読み取り植物で遊べる。そして、子どもたちがこのプレートを使い、植物の名前と絵を描くことで、植物について学ぶことが出来る。また、子どもにとって自分で学んで、作ったという実体験はとても大切だ。実体験を通すことで五感が刺激され、こどもたちの好奇心が育っていくからだ。植物に触れることができ、いっぱい遊び、五感を刺激し、好奇心を育てることが出来るため、子供たちにとって良い経験となると思う。	子どもたちは、自然に触れる機会が少なくなっている/自然に触れてもらう機会を作る/植物の名前と絵を描くことで、植物について学ぶことが出来る/自分で学んで、作ったという実体験はとても大切/実体験を通すことで五感が刺激され、こどもたちの好奇心が育っていく/植物に触れることができ、いっぱい遊び、五感を刺激し、好奇心を育てる/	子どもの自然離れ/自然との触れ合いの 機会の創出/絵画表現を通した学びの深 まり/実体験の重要性/ 五感への刺激/好奇心の育ち
8	1年	18～19歳	女性	スマホを使うことが増えた今、QRコードで植物について知れるのは勉強にも知識にもなり、いいと感じた。	植物について知れるのは勉強にもなり 知識にもなり	植物についての知識の増加
9	1年	18～19歳	女性	子どもの観点からの植物名札活用の可能性は、自らが興味を持って植物の遊びを調べ実行し自分たちで遊び方を増やしていく事ができるのでは無いかと考えた。考えた理由として、「スマホ等の電子機器を所有、操作ができる子どもが増加している」と「遊びの方法が提示されてあることで想像の幅が増加する」という2つが挙げられる。スマホ等を使用する子どもが増加していることについてマイナスに捉われてしまう事が多い。だが、マイナスに捉えるのではなく子どもたちの学びのきっかけとしてプラスに考えることができる。植物名札は、ICTを活用した子どもたちの興味関心を刺激するものである。遊び方が予め提示されてあることで、子どもの想像・創造力の増進、そして「他の遊び方」についての疑問等の興味に繋がる。以上から、植物名札を使用することで子どもは、自ら調べ実行する力が身につく可能性がある。	自ら興味を持って植物の遊びを調べ実行し自分たちで遊び方を増やしていく事ができる/子どもたちの学びのきっかけとしてプラスに考えることができる/ 子どもたちの興味関心を刺激する/ 遊び方が予め提示されてあることで、 子どもの想像・創造力の増進、 そして「他の遊び方」についての 疑問等の興味に繋がる	主体的/遊びのアイデアの増加/学びの きっかけ/遊び方の提示による想像力・ 創造力の喚起・疑問の生成による探究 心の高まり

テキスト		
〈3〉 左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉 テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉 疑問・課題
保護者との共有による コミュニケーションの機会増加	植物を知る機会と親子間での コミュニケーションの機会の創出	具体的なコミュニケーションの内容(家庭内での 会話の話題・自然遊び・自然の生態や仕組みなど の更なる探究等)は何を指すか。
	植物の生態を主体的に知る機会	
歴史や文化理解/ 持続可能性への意識の高まり	歴史や文化への理解を通じた 持続可能性への意識の高まり	
新たな道具との関わり	新たな道具であるICTと関わる機会	植物名札のQRコードを読み取る主体は誰か。また 読み取る主体によって学びの違いはあるか。
	植物を主体的に知る機会と自然の仕 組みや生態系への更なる知識の獲得 への意欲の高まり	QRコードで読み込んで閲覧出来る動画にどの程度 の内容(植物の特性・安全面への配慮・関係する 生物との関わり等)まで組み込むべきか。
保育者や次世代の子どもの自然離れ	自然遊びの継承者の不足を踏まえた 平等な学びの機会の保障	自然遊び文化の継承を妨げる要因(保育者の自然 との関わりへの抵抗感の背後にある要因)は何 か。
子どもの原体験の不足/活動の過程における 学びの深まり/原体験による学びの重要性	子どもの原体験不足による自然離れ /絵画表現による作成過程での植物 の特徴への理解の深まり/ 自然と関わる機会/ 五感を通じた原体験による好奇心の 育ち	自然遊び文化の継承を妨げる要因(子どもの自然 離れの背後にある要因)は何か。植物名札を作成 する主体によって活動のねらいが異なるのでは? 子どもが主体の場合には、植物の特徴を知ること に加えて、道具や素材の特性を活かした学びとい う点にも重点が置かれる。一方で、活動の方法も 保育者・保護者が主体であれば自身の情報機器で 調べて描くことが想定されるが、子どもが主体と なる場合に同様の方法とするのか、活動方法につ いての想定も必要になる。
知識の増加による新たな活動への意欲の喚起	新たな活動への意欲に繋がる植物に ついての知識の増加	自然遊びには一定の知識の共有が特性を知る上で 必要となるが、どの程度まで動画内に組み込む必 要があるのか。
ICT活用のポジティブな側面への着目/ 学びの芽となる遊び方の提示/ 遊びを通じた探究心の高まり	学びの芽となるICTの活用/ 遊び方の提示による想像力・創造力 の喚起と探究心の高まり	子どものアイデアが活動の展開の可能性を大きく 広げるが、各植物を使った遊び方を動画を通して 示してしまうことによって遊びの創造性が抑制さ れる恐れがあるのではないか。その恐れを解消す るために、動画の工夫や保育者や保護者の関わり (援助)にはどのような点が考慮される必要があ るのか。

<p>ストーリーライン</p>	<p>本教材の子どもの観点からの活用可能性について、<u>自然遊びの継承者が減少し、子ども自身も自然との関わりが希薄化している現状を踏まえると、子どもに「自然と主体的に触れ合う機会」を提供する役割を担い得ることが挙げられる。</u>子どもは本教材を通して、対象となる植物の遊び方を知り、実際に自然に触れる契機を得ることで、<u>五感を通した原体験として自然への関心を深めていくことが期待される。</u>こうした経験は、<u>植物の生態や自然の仕組みへの理解を広げるとともに、地域の歴史や文化へと関心が連続していく可能性が示唆された。</u>また、<u>遊び方が予め提示されていること</u>によって、子どもは自然物を用いた遊びを具体的にイメージしやすくなり、<u>想像力や創造力が喚起されることが予想される。</u>その結果、本教材は子どもの探究心を促進し、<u>遊びを通して学びを自ら広げていく支点として機能する</u>ことが期待される。さらに、園内に設置された本教材は、すべての子どもにアクセスが可能であり、<u>植物への学びが平等に保障される</u>という特徴を有していると考えられる。加えて、本教材を子ども自身が作成する場合は、<u>絵画表現を通した制作過程そのものが、植物の特徴を深く理解する学びの機会となる可能性が示された。</u>QRコードを自ら読み取る経験は、<u>ICT機器を新たな道具として主体的に扱う経験</u>も伴っていた。こうした学びや気づきは、家庭へと持ち帰られ、子どもが保護者に遊びの内容を共有することで、<u>親子間のコミュニケーションの契機</u>にもなり得ることが見出された。</p>
<p>理論記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本教材の背景には、自然遊びを継承する大人の減少と子どもの自然離れという社会的状況が存在することである。そのため、本教材は自然と主体的に触れ合う機会を補填し、体験的な学びを再構築する機能を担うと考えられる。 ・五感に基づく原体験として自然遊びに取り組むことは、植物や自然環境に関する知識の獲得を促進するとともに、その学びから派生する好奇心の高まりによって、歴史や文化への理解、さらには持続可能性への視点へと学びが連続する可能性を内包している。 ・本教材に含まれる「遊び方の提示」は、自然物を媒介とした遊びを具体化し、子どもの想像力・創造力を喚起する要素として機能する。これは、自然との関わりを広げていく探究的な学びを促す点で重要である。 ・園内に本教材が設置されることにより、子どもは平等に自然物へのアクセスが保障され、自然環境を理解する機会がすべての子どもに開かれたものとなる。 ・子ども自身が本教材の制作に関わる場合には、絵画表現を通して植物の特徴を観察し、自然物に対する理解を深めるだけでなく、QRコードの読み取りといったICT活用の経験も伴い、現代的な学びの道具を扱う力の育成にも繋がると考えられる。 ・本教材をきっかけとした自然遊びの体験が家庭で保護者に共有されることで、親子間でのコミュニケーションが新たに生まれるという点も、教材の重要な機能として位置付けられる。
<p>さらに追うべき点、課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本教材においてQRコードを読み取る主体を誰に設定するかという問題が挙げられる。子ども自身が主体的に情報へアクセスする場合と、保育者や保護者が介在する場合とは、学びの深まり方や体験の意味づけが異なる可能性があり、その差異を明らかにする必要がある。 ・教材の作成者と利用者を誰に設定するかによって、学びのねらいや体験の構造が変容する可能性がある。例えば、子ども自身が教材を作成する場合には、表現活動を通した深い理解が期待される一方、保育者が作成した教材を子どもが利用する場合には、知識の獲得や探究の入り口として機能するなど、学びの性質に違いが生じると考えられる。 ・本教材を通して閲覧できる動画内容の構成に関して、どの範囲まで情報を含めるべきかという検討が求められる。例えば、植物の特性や安全面への配慮、周辺に棲息する生物との関わりなど、子どもの理解や興味の発展に影響すると考えられる要素をどこまで提示すべきか、教材の目的や対象年齢によって調整する必要がある。 ・遊び方を示す本教材がもたらし得る「創造性の抑制」の懸念に対しては、保育者や保護者がどのように援助し、子どもの主体性や探究心を損なわない関わりを行うかが重要な点となる。大人の援助の在り方は子どもの遊びの広がり大きな影響を与えるため、適切な援助の在り方を見極めることが求められる。 ・自然遊び文化の継承を妨げている要因についても明らかにする必要がある。保育者自身の自然との関わりに対する抵抗感や、子どもの自然離れを生み出す要因など、環境・心理・社会的な側面を複合的に検討することが求められる。 ・本教材をきっかけに広がる親子間のコミュニケーションについても、その具体的内容を明確化する必要がある。家庭内での自然に関する会話、自然遊びの共有、植物の生態や仕組みへの更なる探究など、どのような学びや関係性の変化が生じるのかを丁寧に検証することは、本教材の意義をより実証的に位置付ける上で重要である。

保護者の観点からの活用可能性

回答者属性				テキスト		
No.	学年	年齢層	性別	保護者への活用可能性	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え
1	1年	18～19歳	女性	子供と一緒に作ることで子どもとの時間も増えるし自分の子の知らない一面を見ることができるかもしれない。それに地域でしていれば近所さんとの交流にも繋がる。	子供と一緒に作ることで子どもとの時間も増えるし自分の子の知らない一面を見る/地域でしていれば近所さんとの交流にも繋がる	共に学ぶことによる子どもの新たな一面の発見/地域との交流の機会の創出
2	1年	18～19歳	女性	子どもと一緒に植物について学ぶことができる。	子どもと一緒に植物について学ぶ	子どもと共に学ぶ機会の創出
3	1年	22歳以上	女性	子どもや保育者、地域の人たちとの繋がりのきっかけになり得る。家庭や仕事場以外の第3の居場所づくりのきっかけになり得る。	子どもや保育者、地域の人たちとの繋がりのきっかけ/家庭や仕事場以外の第3の居場所づくりのきっかけ	家庭・保育施設・地域との繋がりの機会の創出/新たな居場所づくり
4	1年	18～19歳	女性	親子の中が深まる。	親子の仲が深まる	親子関係の深化
5	1年	22歳以上	女性	家庭内で自然遊びについて話題が生まれ、保護者が自分の知識を子どもに伝えることで、親子の共通の話題となります。また、それを通して子どもの興味や関心を理解するきっかけにもなります。	家庭内で自然遊びについて話題が生まれ、保護者が自分の知識を子どもに伝えることで、親子の共通の話題/子どもの興味や関心を理解するきっかけ	親子間での共通の話題/ 親から子どもへの知識の伝達
6	1年	18～19歳	女性	自分の知らないことを子供と一緒に学ぶことは保護者にとっても子どもにとっても良い機会になると思う。	自分の知らないことを子供と一緒に学ぶ	体験を通じた新たな知識の獲得の機会/ 子どもと共に学ぶ
7	1年	18～19歳	女性	最近の保護者の世代には、自然と関わる遊びの経験が少ない人が増えてきています。そのため、QRコード使い遊び方を載せてあげることで、知らなかったことを知ることができる。例えば、タイサンボクを使った的当て、レッドロビンを使った葉っぱのスタンドグラスなど、聞き馴染みの無い遊びを学ぶことが可能。また、どれも簡単なので親子ですぐ遊べる所も良い。	最近の保護者の世代には、自然と関わる遊びの経験が少ない人が増えてきています/ 遊び方を載せてあげることで、知らなかったことを知ることができる/ 聞き馴染みの無い遊びを学ぶことが可能/ 簡単なので親子ですぐ遊べる	保護者の自然との関わり方の経験の減少/ 体験を通じた新たな知識の獲得の機会/ 遊ぶためのハードルの低さ
8	1年	18～19歳	女性	子供との遊びの知識が増えると感じた。	子供との遊びの知識が増える	子どもとの遊びのレパートリーの蓄積
9	1年	18～19歳	女性	保護者の観点からの植物名札の可能性は、自然遊びを詳しく知る機会・時間が無くとも子どもと共に自然遊びを楽しむ、我が子との家族の時間を増やすことができる可能性があると考えた。理由として「植物遊びを調べる暇が無い、億劫になるのではないか」という点が挙げられる。植物名札に予め植物遊びの見本、やり方・配慮すべき事項が書いてあれば調べる必要が無く、親子で安全に植物遊びができると考えた。以上から、植物名札には保護者の負担になる調べる作業を軽減することができ、保護者が子どもと過ごす時間を増やすことができる可能性があると考えた。	保護者の負担になる調べる作業を軽減する/ 子どもと過ごす時間を増やすことができる/ 植物遊びの見本、やり方・配慮すべき事項が書いてあれば調べる必要が無く、親子で安全に植物遊びができる	保護者の時間的な負担軽減による 子どもとの遊びの時間の確保/ 安全に遊ぶための配慮事項の必要性

テキスト		
〈3〉 左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉 テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉 疑問・課題
共主体的な学び/ 子どもの潜在能力の顕在化/ 地域交流	共主体的な学びによる子どもの潜在能力の 顕在化への気づき/ 地域交流の機会の創出	地域で行う場合に、活動のきっかけを与えるのは 誰か(子ども自身・保護者・地域の人)。 教材の管理は誰が行うのか。
共主体的な学び	共主体的な学びの機会の創出	
学びの架け橋(Learning Bridge) 孤立感解消のためのコミュニティ としての機能	家庭・保育施設・地域を繋ぐ 学びの架け橋(Learning Bridge)/ 孤立感解消のための新たな コミュニティの創出	地域社会における保育施設の機能について、家 庭・保育施設・地域との「学びの架け橋」になる 上で、本教材を具体的にどのように活用していく 必要があると考えられるか。
	親子関係の深化	
親子間でのコミュニケーションの促進/ 自然遊びの文化的伝承・世代間伝達	自然遊びの文化的伝承・世代間伝達による 親子間でのコミュニケーションの促進	文化的伝承や世代間伝達を行う上で配慮すべき内 容として何が考えられるか。
未知への探究の機会/ 共主体的な学び	未知への探究の挑戦となる 共主体的な学びの機会の創出	
保護者の自然離れ/ 未知への探究の機会/ 実践への参入障壁の低さ	保護者の自然離れ解消のための容易な関わり を想定した未知への探究の機会の創出/ 容易な導入による即時的な活動の実施	直接体験の最初のきっかけづくりとしての重要な 役割を果たすと考えられるが、その後の展開とし て親子間で意識する必要があることは何か。
遊びの知識の蓄積・スキルの向上	子どもとの遊びの知識の蓄積・ スキルの向上	
多忙な保護者を取り巻く時間的制約/ 子どもとの遊びの時間の確保の重視/ 安全面への配慮	保護者の多忙感/ 時間的制約下での最大限の遊びの時間の確 保/安全面への配慮の必要性	教材に頼りすぎること親子間でアイデアの創造 性が抑制されてしまわないか。時間的な制約があ る中でより興味を広げることができる工夫として 何が挙げられるか。 安全面への配慮として具体的に何を組み込む必要 があるのか。教材のQRコードを読み込む主体に よって組み込む内容を変える必要があるのではな いか。

<p>ストーリーライン</p>	<p>本教材の保護者の観点からの活用可能性について、近年の<u>保護者の多忙感や自然との関わり</u>の希薄化の現状を踏まえ、いくつかの特徴的な学びの機会が示唆される。第一に、本教材を通して身近な植物を使った自然遊びを子どもと共に体験することで、<u>保護者自身も未知への探究の機会を得ることができる</u>。この過程で、<u>子どもとの遊びに関する知識の蓄積やスキルの向上</u>が促されるとともに、<u>子どもの潜在的能力が顕在化する様子</u>を実感できる。また、遊びの過程で<u>保護者が自身の文化的・歴史的経験を子どもに伝える場面</u>も生まれ、<u>親子間での新たなコミュニケーションが促進される</u>。さらに、保育施設での活用においては、<u>保護者同士や保育者との交流が生まれ、保護者の孤立感の解消やコミュニティ形成の契機</u>として機能する可能性がある。地域で活用する場合には、<u>地域の人や場との関わりを通して地域理解の深化や連携強化</u>が期待される。これらを踏まえると、本教材は<u>家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な機能</u>としての役割を担う可能性がある。一方で、自然遊びに関する知識が不十分な保護者が利用することを想定し、<u>安全面への配慮を適切に組み込む必要がある</u>。</p>
<p>理論記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本教材は共主体的な学びを促進する媒介的教材として機能する。 ・保護者が子どもと共に遊ぶことにより、自然遊びを通じた子どもの潜在的能力の顕在化が可能となる。 ・遊びの過程で保護者が自身の文化的・歴史的経験を子どもに伝えることは、世代を越えた知識伝達および親子間のコミュニケーション促進という学びのメカニズムを示している。 ・保育施設での活用は、保護者同士や保育者との交流を生み、保護者の孤立感解消やコミュニティ形成を促す点で社会的媒介の役割を果たす。 ・地域での活用においても、地域住民や場との関わりを通して地域理解の深化や連携強化という教育的・社会的効果が理論的に支持される。 ・上記を踏まえ、本教材は家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な機能としての役割を担う可能性があると考えられる。 ・自然遊びの経験が少ない主体が使用する場合には、安全面への十分な配慮が必要である。
<p>さらに追究すべき点、課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域での活用においては、活動のきっかけを誰が担うか（子ども自身、保護者、地域住民）を明確にする必要がある。それによって、教材の管理や活用の方法にも違いが生じる可能性がある。 ・家庭・保育施設・地域を繋ぐ媒介的な役割をもつ教材として活用する場合、保育施設の役割や具体的な活用方法を明確化することが求められる。 ・文化的継承や世代間での知識の伝達を行う際には、配慮すべき内容（伝達の順序や表現方法、年齢や経験差への配慮など）を検討する必要がある。 ・本教材を直接体験のきっかけを与える重要な役割を果たす一方、親子間での学びの展開を意識的に設計することが求められる。 ・教材の提示内容に頼りすぎることによって、親子間での創造的なアイデアが抑制される恐れがあるため、対象植物の特性や危険生物への対応、使用する道具やICT機器の扱いなど、主体によって適切に調整される必要がある。

保育者の観点からの活用可能性

No.	回答者属性			テキスト		
	学年	年齢層	性別	保育者への活用可能性	(1) テキスト中の注目すべき語句	(2) テキスト中の語句の言い換え
1	1年	18~19歳	女性	保護者、園児どちらとも深く関わる機会になるし、親子関係を見ることもできる。今後支援していく親子がどのような事を求めているのか判断できる機会にもなると思う。	保護者、園児どちらとも深く関わる機会になる/ 親子関係を見ることもできる/ 支援していく親子がどのような事を求めているのか判断できる機会	保護者・園児との深い関わりの機会の創出/ 親子関係を見る
2	1年	18~19歳	女性	園で子どもたちに植物について教えることができ、今後の植物の育て方に役立つ。	子どもたちに植物について教える/ 植物の育て方に役立つ	子どもに植物の知識を伝える/ 植物栽培に役立つ
3	1年	22歳以上	女性	保育所や幼稚園を飛び出し、地域との繋がりを築きかけになり得る。	地域との繋がりを築きかけ	地域との繋がりの契機
4	1年	18~19歳	女性	色々な自然遊びを学ぶことができる。	色々な自然遊びを学ぶ	多様な自然遊びの体験
5	1年	22歳以上	女性	子どもたちに自然遊びを口や絵本で伝えるだけでなく、保育者も子どもと一緒にQRコードを使って調べることができ、子どもたちの興味や関心を引き出すことができます。さらに、QRコードをきっかけに自然遊びを知り、それを発展させることで、子どもの遊びの幅がより豊かになります。また、その際には子ども一人ひとりのアレルギーにも配慮しながら、活動を工夫することが可能です。	子どもと一緒にQRコードを使って調べること、子どもたちの興味や関心を引き出す/自然遊びを知り、それを発展させることで、子どもの遊びの幅がより豊かになる/ 子ども一人ひとりのアレルギーにも配慮	子どもと一緒に調べて興味や関心を引き出す/自然遊びを経験・展開することによる遊びの幅の広がり/ アレルギーへの配慮
6	1年	18~19歳	女性			
7	1年	18~19歳	女性	QRコード付植物名札は保育者にとって貴重な存在であると言えるだろう。なぜなら、はじめに、植物名札を見て、その植物がどこに生えているかを探る。それにより植物の名前や形を知ることが出来る。また、植物に触れることで、色、匂い、など子どもたちの五感を刺激することが出来る。近年、子どもたちの外遊びが減少している中で、五感を刺激することが出来る体験は貴重であり、良い経験になるだろう。そして、QRコードを読み取ることで、遊び方を知ることが出来る。遊び方は簡単なものが多く、道具は保育施設にあるものが殆どであるため、すぐに遊びにうつすことができる。さらに、今回使用した植物名札は、ニッセイ緑の財団から頂いた、「樹木プレート」である。これは、申請すれば誰でも頂けるものであり、実際に子どもたちが作ることも可能で、保育に活用することが出来る。	植物名札を見て、その植物がどこに生えているかを探る/植物の名前や形を知ることが出来る/植物に触れることで、色、匂い、など子どもたちの五感を刺激する/子どもたちの外遊びが減少/遊び方を知ることが出来る/ 遊び方は簡単なものが多く、道具は保育施設にあるものが殆どであるため、すぐに遊びにうつすことが出来る/実際に子どもたちが作ることも可能	植物の生育場所を探る/ 植物の形状や名称を学ぶ/ 五感を刺激する植物との触れ合い 屋外遊びの機会の減少/ 簡単な手順と身近な道具ですぐに遊べる/ 保育現場でも子ども主体で取り組める制作活動
8	1年	18~19歳	女性	子供たちが自然に触れ、遊び楽しんでもらうために活用できると感じた。	子供たちが、自然に触れ、遊び楽しんでもらうために活用できる	子どもが自然に触れて遊びを楽しむための活用
9	1年	18~19歳	女性	保育者の観点での植物名札の可能性は、若年保育者の自然遊び知識の向上、そして保育現場のICT活用技術の向上となり若年保育者とベテラン保育者お互いの知識を持ち寄ることで職場内のお互いの理解が進むと考えた。理由として、「若い世代は身近に自然が少なく昔から継承されてきた遊びを知らない」という点から植物名札を活用することで若い世代の保育者にも沢山の自然遊びを知ってもらうことができ、子どもたちに繋ぐことができると考えた。「ベテラン保育者と若い保育者の得意とする分野が違っている」という点から、知識・技能を植物名札の作成で使用するということお互いの知識・技能の向上、そして職場の人間関係の風通しが良くなる可能性があると考えた。以上の3つの視点から植物名札はただ植物遊びをする為だけのものではなく、それ以上の可能性を秘めているということが分かった。	若年保育者の自然遊び知識の向上/ 保育現場のICT活用技術の向上/ 若年保育者とベテラン保育者お互いの知識を持ち寄ることで職場内のお互いの理解が進む/ 若い世代は身近に自然が少なく昔から継承されてきた遊びを知らない/若い世代の保育者にも沢山の自然遊びを知ってもらうことができ、子どもたちにも繋ぐことができる/ベテラン保育者と若い保育者の得意とする分野が違っている/お互いの知識・技能の向上/職場内の人間関係の風通しが良くなる	豊富な遊びのレパートリーをもつ ベテラン保育者/ICT活用技術がある 若手保育者/若手とベテランが知識を持ち寄ることで促進する職場内の相互理解/若手保育者の伝統的な遊びのレパートリーの不足/ 若年保育者の多様な自然遊びの習得による子どもたちへの遊びの継承

テキスト		
〈3〉 左を説明するようなテキスト外概念	〈4〉 テーマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)	〈5〉 疑問・課題
家庭と園の関係性を強化する機会の創出/ 保護者理解	保護者理解の場の創出による園と 家庭の連携強化	
植物に関する学びの支え/ 植物栽培の知識習得に寄与	多様な自然との関わり方の継承	
地域理解	園での学びを活かした地域理解	
	多様な自然遊びの知識の蓄積・ スキルの向上	
内発的動機づけを促す関わり/ 自然遊びの理解・発展による 主体的・創造的な学びの促進/ 安全面に配慮した取り扱い	主体的・創造的な学びに繋がる 内発的動機づけを促す支援者の関わり/ 安全面の配慮事項を考慮した 教材・活動の選定	アレルギー以外に配慮が必要な点として何が挙げ られるか。
園内の植物分布の把握/ 植物の観察を通じた知識の獲得/ 五感を用いた原体験/ 子どもの自然離れ/ 子どもが主体的に制作できる 保育活動に適した教材	園内の自然環境への理解/ 自然離れが進む子どもへの 原体験の機会の重要性/ 容易な導入による即時的な活動の実施	園内に教材を設置する場合、樹木以外の野草はど のような設置方法が考えられるか。
子どもの自然遊びへの活用/	子どもが自然に親しみながら 遊びを楽しむ機会としての活用	
保育者の世代間での交流を通じた相互理解 の促進・協働的関係の構築	若手保育者とベテラン保育者の相互の課 題/世代間交流による相互理解の促進・ 協働的関係の構築	職場内の良好な人間関係を構築するために必要な 要素として何が挙げられるか。 教材作成の時間が十分に園全体で取ることができ ない場合はどのような工夫が必要か。

<p>ストーリーライン</p>	<p>本教材の保育者の観点からの活用可能性について、<u>若年保育者に見られる自然離れの傾向とICT活用経験の少ないベテラン保育者の現状を踏まえ、いくつかの特徴的な学びの機会が示唆される。</u>第一に、<u>保育者の世代間での交流を通じた相互理解の促進・協働的関係の構築</u>である。本教材は両者の得意分野を融合させて作成するため、作成過程での交流が自然と生まれ、協働的に取り組む機会を創出する。また、教材作成を通して双方の知識とスキルを兼ね備えた保育者は、<u>容易な導入による即時的な活動の実施が可能となるため、子どもの主体的・創造的な学びを支援する内発的動機づけの促進者</u>となり、<u>多様な自然遊びの継承</u>が可能となる。さらに、<u>園内の自然環境への理解が深まり、子どもの自然離れの現状に対して五感を用いた原体験の機会を創出することができる。</u>第二に、<u>保護者理解の深まり</u>である。本教材を媒介として<u>親子の関わりを把握するだけでなく、保育者自身が関わることで園と家庭との連携が強化される。</u>第三に、<u>地域との関わり</u>の創出である。保育施設での学びを地域に持ち出すことで、子どもや保護者の地域の自然への興味が高まり、<u>地域理解の深化に繋がる可能性</u>がある。第四に、<u>アレルギーなどを考慮した教材・活動の選定が必要</u>である。対象の植物との関わりに潜む危険について、安全面の観点から十分配慮を行う必要がある。</p>
<p>理論記述</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・本教材は、保育者間の協働的学習を媒介する教材として機能する。教材作成を通して、若年保育者とベテラン保育者の異なるスキルが融合され、世代間交流を通じた相互理解と協働関係の構築が促進される。 これにより、子どもの主体的・創造的な学びを支援する内発的動機づけの促進者としての保育者の役割が強化される。 ・本教材を活用することで、園内の自然環境への理解が深まり、五感を通じた原体験の創出が可能となる。 ・本教材を媒介として親子関係や保護者との関わりが把握できるようになり、園と家庭の連携強化が期待できる。 ・地域での活用を通して、地域理解や地域社会との連携強化にも繋がると考えられる。 ・本教材の使用にあたっては、アレルギーやその他の安全面への配慮が必須である。
<p>さらに追究すべき点、課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・園内に本教材を設置する場合、樹木以外の野草の設置方法や管理の工夫について検討が必要である点である。 ・職場内で良好な人間関係を構築するために必要な要素や、教材作成の時間が十分に園全体で確保できない場合にどのような工夫をすべきか、といった点が課題として示唆される。 ・アレルギー以外に配慮すべき安全上の要素（棘のある植物や毒性のある植物など）が何かを明確化する必要がある。 ・上記の課題は、本教材の活用の効果的実施と安全確保、世代間交流の質を高めるために重要である。